垂直の啓示　アンビヴァレンツ

予感はあった。

2019年。場所は東京造形大学の八王子市郊外にあるキャンパス。美術教育に携わった多くの表現者が、その退任にあたって、その教育施設の空間を活かして、回顧展を開くことは間々あることである。通常は美術館などのギャラリー空間で展示されることが多い。しかし、母袋俊也の場合、まったく異なっていた。もちろん、美術館である6号館は当然、使い切っているのだけれど、10号館の絵画棟とカフェテリアのスペースも活かし、その手前の広場には「見晴らし小屋」が仮設されていた。とくに10号館の吹き抜け空間の天窓に近いポイントに三点の「Himmel」シリーズが横並びになり、その下に床面から「ヤコブの梯子」が垂直に設置されていた。

その地軸そのものを想起させるようなスケール感のインパクトは強烈だったけれど、あまりに絵自体のマチエールは観者から遠く、どこかロマン主義的な脱臼を余儀なくされたともいえたように思う。ただ、それは余韻を残し、予感を醸成させることになる。

そして、3年前のGALLERY TAGA 2での個展「ta･KK･ei 2021」とのとき、一階の壁面に飾られた、ゴルゴダの丘を描く風景の大地のマチエールがとても身近に感じられ、単なるスキーム（図式）としての天地ではない、垂直性が足裏の実感を伴って覚醒する垂直性の表現へと変容したように感じられたのだった。

そして、それは、原爆の図美術館での2022年から翌年にかけて開催された個展「魂－身体 そして光《ta・KK・ei》《TA・GEMBAKZU》」で、都幾川沿いの丘のうえに建てられた美術館の場所性とみごとなまでに符合した。

今回、さらに「Himmel」シリーズに重点を置きながら、画廊空間の垂直性の特性を生かし、まったく隙なく作品をぴたりとはめ込み、二階には三副対の「ta・KK・ei」の新作が待ち構えるという設えになっている。しかし、天窓からのひかりがすべての動線を規定していて、床の水平性はいままでになく後退し、とくに二階では白い床が存在感を抹消し、自分がいまどこにいるのか一瞬分からなくほどの突き抜けた垂直性に、間近に作品のマチエールを感じながら、全身が直撃されることになる。

それは足元の大地性とも不可分なのだが、そして、逆説的に、突き抜けていればこそ、ますますそのことを意識するのだが、解放感もただならぬものがある。そのアンビヴァレントな関係は、まさに磔刑図同様、わたしたちの感性すべてが宙づりになっていることを証しているのである。それは、痛苦でありながら、同時に感情を越えた浮遊でもある。

あの予感は、間違いなく、多義性を捨てることなく、確実にいま実現したのではなかろうか。

水沢 勉（みずさわ・つとむ）／神奈川県立近代美術館長